様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月１日現在

機関番号：18001
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：20520416
研究課題名（和文）　北琉球方言の調査研究―与路島方言・請島方言・喜界島方言を中心に―

研究課題名（英文）　A Field Research Study of Northern Ryukyu Dialect

研究代表者
中本　謙（NAKAMOTO KEN）
琉球大学・教育学部・准教授
研究者番号：10381196

研究成果の概要（和文）：
琉球方言区画上、北琉球奄美方言に属する与路島方言、請島方言、喜界島花良治方言を取り上げ、国際音声字母表記（I.P.A）を用いた臨地調査をおこなった。これらの地域は比較的方言資料が少なく、早急な調査が必要とされている。今回、与路島方言、請島方言については、記述的研究として音韻体系、中央語との音韻対応、動詞、形容詞の活用、助詞の用法を明らかにし、喜界島花良治方言については音韻体系、中央語との音韻対応を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
Based on the Northern Ryukyan dialect division, we conducted field research at Yoro-jima, Uke-jima and Kikai-jima Keraji, all of which belong to the Northern Ryukyu-Amami dialect division, and compiled the result into phonetic data that comply with the International Phonetic Alphabet. These regions are of particular interest to linguists as there are few documents that shed light on the phonetic, as well as grammatical, systems of the dialects traditionally spoken in the area. We concentrated on the phonetic vernacular systemic structure, particularly as it pertains to verbal conjugations and adjectival inflections, in our survey of Yoro-jima and Uke-jima. At Kikai-jima Keraji we concentrated on the phonetic system of the regional dialect in order to reveal the structural entirety of the local language.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語学
キーワード：方言

１．研究開始当初の背景

琉球方言研究は1895年、B.H.chamberlainにより日本語唯一の姉妹語として位置づけられ、以降、比較的多くの研究者によりその共時態が明らかにされ、さらに比較言語学的方法を用いた研究が行われてきた。しかしながら、琉球方言は、島嶼という環境もあり類まれな多様性を示すことから、全体の概観は明らかにされたものの、方言資料の蓄積は十分であるとは言えない。さらに、琉球方言を話す話者が高齢なことから、早急な資料収集が望まれている。また、一方では、マスメディア、交通の発達、共通語教育などのあらゆる社会的影響により方言が急速に変化しているといった状況がある。従って、琉球方言の言語実態の全容を解明するためには、従来の構造言語学に加え、社会言語学的な視野を取り入れた研究が必要である。

このような観点に基づいて、これまで琉球方言研究を行ってきた。その成果として平成14年には、博士論文「琉球方言の音韻研究－世代別調査も含めて－」をまとめた。概略、内容を示せば、全琉球を網羅すべく北は奄美方言から南は八重山方言まで調査資料の少ない地域を調査地点に定め、世代別に I.P.A（国際音声字母）表記を用いた臨地調査を行い、各方言の音韻の実態を世代別に明らかにした。さらに、言語の内的変化（音韻規則に従った変化）、外的変化（共通語の影響などによる類推変化）の両面から全琉球を視野に入れた比較研究を行い、琉球方言音韻のどのような部分がどのように変化するのかを具体的に明らかにした。博士課程修了後も「平成13年度～平成14度科学研究費補助金　基盤研究(B)『琉球島嶼間のネットワーク形成と変容に関する総合的研究』」、「平成14年度～15 年度科学研究費補助金（基礎研究(C)(2)）『沖縄県宮古・八重山方言の調査研究』」などに研究協力者として参加し琉球方言資料の充実に努めてきた。平成16年4月に琉球大学に赴任して以降は、「平成 17 年度～18年度科学研究費補助金（若手研究（B））『奄美・与那国方言の調査研究』」の交付を受け、さらなる琉球方言資料の充実に努めている。これまでの調査研究から琉球方言全般に言えることは、在来の方言はほぼ継承されておらず、おおよそ現在の老年層（70歳以上）を最後に失われていくだろうということである。これに関しては、琉球大学に赴任後、学生及び周辺地域との交流を通してさらに強く実感している。実際、沖縄本島の多くの地域では、20歳代以下は、在来の方言を話すことはもちろん、聞くこともできない状況である。この実態は本土方言に比して衝撃的である。このような状況であるにもかかわらず、島ごと、地域ごとに違いを示す琉球方言資料の蓄積は十分であるとはいえず、未だに資料がほぼ皆無の状態の地域すらある。

２．研究の目的

以上の状況を踏まえ、本研究の目的を以下のとおり設定する。

1). 方言資料の乏しい地域を選択し、高齢話者の琉球方言の記述的研究を行い、琉球方言資料の増幅に努める。これは、次世代に方言が継承されていない現状では、急務であり、焦りすら感じる。

地域としては、琉球方言区画上、北琉球奄美方言に属する鹿児島県大島郡瀬戸内町与路島方言、鹿児島県大島郡瀬戸内町請島方言、鹿児島県大島郡喜界町花良治方言とする。これらの地域は琉球方言の中でも調査資料が少ない地域であり、平山輝男(1966)『琉球方

言の総合的研究』や中本正智(1976)『琉球方言音韻の研究』等に断片的な資料がある程度である。従って、音韻、文法、語彙の体系的な調査を行いその実態を明らかにし、基礎資料の充実をはかる必要がある。

2).今回対象とする地域は、琉球方言の中でも特にバラエティに富んだ音声が多く観察される。これらの特徴的な現象の中には報告はされていてもその要因及び成立について十分明らかにされていないものもあるため、その解明も視野に入れて研究をすすめる。

３．研究の方法

国際音声字母表記（I.P.A）を用いて、鹿児島県大島郡瀬戸内町与路島方言、鹿児島県大島郡瀬戸内町請島方言、鹿児島県大島郡喜界町花良治方言の音韻、文法、語彙の記述をおこなう。琉球方言は、現代共通語にはない音声、音韻が多くあらわれるため、国際音声字母表記（I.P.A）で正確に記述することは、研究者間でデータを共有する意味でも重要である。得られた資料は、構造言語学理論に基づいて体系化する。

４．研究成果

(1)音韻

ここでは、代表して与路島方言の音素を示し、請島方言、喜界島花良治方言については主な音韻的特徴のみを示す。

① 与路島方言の音韻

音素

母音音素　/ i, e , ï , ë , a , o , u　/　7 個

子音音素　/ ’ , h , kʔ , k , g , tʔ , t , d , cʔ , c , s , z , r , n , p , b , m /　17 個

半母音音素　/ j w /　2 個

拍音素　/ N Q /　2 個

音韻の特徴

・母音音素/ ï /、/ ë /が認められる。

語例

[mïː]（目）[mëː]（前）[kïː]（木）[këːtí]（欠ける）・・・

・無気喉頭化音が音素として認められる。

語例

[kʔiɲu]（昨日）[ʔikʔi]（息）[kʔu·ḳ]（釘）[ʔiˑkʔutṣ]（いくつ）[tʔuduṃ]（鼓）[tʔaːṛ]（二人）[tʔunuː]（角）[tʔïna]（綱）[ʔitʔuːṭ](五つ) [tʃʔuːi]一日[tʔʃiː](血)・・・

・語中のｍ音の w̃音化がみられる。

語例

[ʔaw̃ï]（雨）[naw̃a]（今）[kaw̃a]（鎌）[kaw̃ï]（亀）[tuw̃ïtí]（止める）・・・

・語中のｋはë－ë、a－a、o－o 等の母音に挟まれているときには、脱落する。

語例

[tëː]（丈）[dëː](竹)[sëː](酒)[waːsa]（若い）[toroː](処)[hoːṛ](ほこり)・・・

・子音単独で拍を形成する語がみられる。

[dʒo : ṭ]（上手）[ʃibaṛ]（小便）[ta·ṛ]（誰）[ta·ḳ]（滝）[doːḳ]（道具）[haḅra]（蝶）[tïŋkʔuṖ]（手首）・・・

② 請島方言の音韻的特徴

請島方言の音韻は、与路方言と同じく[mïː]（目）、[mëː]（前）のように音素として/ ï /、/ ë /が認められ、母音音素は７個である。子音においても、[kʔimoː]（肝）[tsʔunoː]（角）のように無気喉頭化音がみられ、音素として認められる。また、与路方言と同様、[kʔup̣]（首）[kʔiṛ]（霧）[mïːṭ]（水）のように子音単

独で拍を形成する語もよくみられる。これは、奄美大島南部方言の特徴でもある。しかし、与路島方言の[ʔawɨ̃i]（雨）のような語中のm音の w̃音化はみられない。

③　喜界島花良治方言の音韻的特徴

母音音素は、与路方言や請方言のように/ ɨ /や / ë /が認められず、/i,e,a,o,u /の５母音である。子音においては、与路島方言や請島方言と同様に[kʔumo]（雲）[tʔumi]（爪）のように無気喉頭化音がみられる。

次に喜界島花良治方言と中央語の音韻対応の特徴を中央語のカ行音、ハ行音との対応を例に示す。

カ行音との対応

中央語のカ子音との対応はア段、エ段、オ段で/ｋ/→/h/の変化がみられる。

中央語のカは花良治方言の/ha/に対応する。

[hatʃi]（垣）[hagi]（影）[hadi]（風）[kani]（金）・・・

[kagami]（鏡）[kadu]（角）のように/ha/とならない例もみられる。

キは/cʔi/に対応する。

[tʃʔitʃuN]（聞く）[tʃʔinnu:]（昨日）・・・

クは/kʔu/に対応する。

[kʔugi]（釘）[kʔumo]（雲）[kʔura]（倉）・・・

クに対応するもののうち、/kus/→/Qs/ の変化がみられる。

[ssu]（糞）[ssuri]（薬）[ssa]（草）[ssariruN]（腐れる）・・・

ケは/hi/に対応する。

[çibuʃi]（煙）[çiruN]（蹴る）[çi:]（木/ケに対応）・・・

コは/hu/に対応する。

[ɸumi]（米）[ɸunu]（この）・・・

コが/ku/の例もみられる。

[kui]（声）[ku:nutu]（九つ）・・・

ハ行音のとの対応

喜界島花良治方言では、次のようにハ行子音の多くはɸであらわれる。

中央語のハに/hwa/が対応する。

[ɸana]（花）[ɸa:]（葉）[ɸagiruN]（禿げる）[ɸaku]（箱）・・・

ヒは/hwi/に対応する。

[ɸikari]（光）[ɸigi:]（髭）[ɸidari]（左）・・・

フは/hu/に対応する。

[ɸuta]（蓋）[ɸuni]（舟）[ɸurunN]（降る）・・・

へは、/hwi/に対応する。

[ɸira]へら[ɸi:]（屁）・・・

ホは/hu/に対応する。

[ɸu:]帆 [ɸuni]（骨）[ɸuruN]（掘る）・・・

他にも喜界島花良治方言の大きな特徴として、歴史的に中央語のワ行のオ段に対応する語の g 音化があげられる。例えば[gutu]（夫）[gunu]（斧）[guriruN]（折れる）のようである。

（２）動詞、形容詞の活用

活用については、与路島方言、請島方言の動詞、形容詞の活用を記述した。

ここでは、与路島方言の動詞「書く」の活用形を示す。

kaku:（志向形）、kaka（未然形）、kak〈wa〉（条件形）、kakï（命令形）、kakna（禁止形）、kak〈gadi:〉（連体形１）、kaki（連用形）、kakijur（終止形１）、kakjum（終止形２）、kakjun（連体形２）、kakjur（du 係結形）、kakju（準体形）、katʃi（接続形）

各活用形の用例

志向形

madʒiN dʒi: kaku:　（一緒に字を書こう）

未然形

wanna: dʒi: kaka m（私は字を書かない）

条件形
naŋ ga kak wa wa: ga jumjum （あなたが書いたら私が読む）
命令形
dʒ: kakï（字を書け）
禁止形
kunnan dʒi: kakna（ここに字を書くな）
連体形１
wa: ga kak gadi ko: nta do:（私が書くまで来なかった）
連用形
waŋ ga kaki boʃa ja:（私が書きたいなあ）
終止形１
ʔantʃʔu ga kakjur kai（あの人が書くだろうか）
終止形２
ʔora ga kakjum nja（お前が書くのか）
連体形２
kakjun tʃʔu ja tar ga（書く人は誰か）
du 係結形
dʒi: du kakjur（字ぞ書く）
準体形
kakju mun na nu:（書くものは何か）
接続形
dʒi: katʃi kkara ʔikjum（字を書いてから行く）

（３）助詞

助詞については、与路島方言、請島方言において臨地調査をおこない、格助詞、係助詞、副助詞、終助詞、接続助詞の記述をおこなった。

ここでは、主だった特徴がみられた請島方言の助詞ガ、ヌについて示す。

請方言において助詞ガ、ヌは、主格、連体の用法がみられ、承ける体言によって以下の区別がなされている。

① 主格用法
自称・対象の代名詞
ʔwa ga ʔikjum（私が行く）
ʔura ga wassam（君が悪い）

指示代名詞（人・事物）
kur ga ʔikjum（これが行く）
ʔur ga wakaram（それがわからない）

親族呼称
tʃaŋ ga turïtï ʔikjum（おとうさんが連れて行く）
ʔudʒi ga kjum（おじさんが来る）

人を表す数詞
tʃʔui ga ʔikjum（一人行く）

人名
hanako ga kjum（花子が来る）

親族名称・人一般
ʔuttu ga kiba:tïddo:（弟が働いてる）
ʔutʃʃu ga ʔatmajum（大人が集まる）

指示代名詞（場所）
kuma ga sudaʃa:（ここが涼しい）

指示代名詞（何）
nu: ga ʔarʃa:（何があるのか）

普通名詞
kï: nu karïjum（木が枯れる）
tun nu tudï ʔikjum（鳥が飛んで行く）

② 連体用法
自称・対象の代名詞
wa: muN（私のもの）
ʔura: muN（あなたのもの）

指示代名詞（人・事物）
kur ga tʔura:（これの顔）

tar ga munʃa:（誰のものか）
kur ga na:（これの中）

親族呼称
ʔuʃʃu: ʃigutu（おじいさんの仕事）

人を表す数詞
tˀar ga muN（二人のもの）

人名
hanako ʔututu（花子の弟）

親族名称・人一般
ʔututun tˀ ura:（弟の顔）
ʔonak nu ʃigutu（女の仕事）
ｋuman mid（ここの水）
daŋ kwa(どこの子か)

指示代名詞（何）
nu: hanaʃi ʃa:

普通名詞
kïn ʔeda（木の枝）
ʔamïn ʔutu（雨の音）
harin sak（針の先）

③　主格用法にみられる新たな弁別機能

請島方言では、普通名詞を承ける助詞ガ、ヌの主格用法において興味深い例がみられた。例えば、

habu ga wuN（ハブがいる）
habu nu wuN（ハブがいる）

このようにハブはガでもヌでも承けることができるが、話者の内省によれば、次のような弁別機能があるという。

ガで承ける場合－確実に目の前に存在が確認できる場合。

ヌで承ける場合－目の前には、確認できないが存在はしている場合。

つまり、ハブの例でいえば、目の前にハブはいないが、その一帯にハブが生息していることを知っている場合はハブ ヌのようになるということである。

このような弁別機能は、隣接する与路島方言ではみられなかった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計２件）

1. 発表者：中本謙、題目：琉球方言の形成、学会等名：文部科学省高度化推進事業・学術フロンティア・プロジェクト「異文化研究としての〈日本学〉」総括シンポジウム『古代末期の境界世界』、2009 年 11 月 14 日、場所：法政大学

〔図書〕（計１件）

1. 高梨修・阿部美菜子・中本謙・吉成直樹『沖縄文化はどこから来たか』2009 年、191 頁－219 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

中本　謙（NAKAMOTO KEN）
琉球大学・教育学部・准教授
研究者番号：10381196